

加賀の技術文化と地域蘭学

本康宏史

Technical Culture in Kaga and Regional Rangaku

はじめに

- ①天文曆学の地平
- ②初期理化学と写真術
- ③杜鵑館の系譜と蘭学者
まとめにかえて

[図文版面]

本稿では、北陸の「技術文化」の諸事例を紹介し、地域社会における蘭学知識との影響関係を確認するため、加賀藩域を中心とした概括的な検証を試みた。

江戸後期、「科学技術」をめぐる諸制度・研究・交流及び器具や製品の製作等、いわば「技術文化」の蓄積は、分野や地域を越えて展開した。例えば、加賀藩でも、大坂の麻田剛立の高弟西村太冲や江戸の本多利明の影響を受けた遠藤高壌、河野久太郎ら金沢の科学者グループが、時法の改正や彗星観測などにみる高水準の天文知識の導入に尽力している。その際、遠藤らは、精巧な「垂搖球儀」を使用して、独自の十三分割時法を制定するなど、蘭学知識にもとづく天文学や理化学の成果を取り入れたのであつた。なお、この背景には、蘭学者杉田成卿の高弟松田東英が考案した箱型望遠鏡など、高度な科学技術が関係していたのである。一方、遠藤を中心とする藩士らは、金沢城下の詳細な町図作成に際し、越中新湊の和算家石黒信由の測量技術を用いつつ、

正確な測量を実施している。その際、遠藤の考案した天体測量器に添えられた刷物には、翻訳者として蘭学医黒川良安の名もみえている。

こうしたなかで、機巧師大野弁吉のケースは、この地域の事例のなかでも特異な存在といえよう。一介の細工職人にすぎない弁吉が、その突出した技術と好奇心から、幕末加賀藩における「技術文化」の、いわばキーパーソン的な様相をみせるに至るのである。このような、弁吉に代表される職人による地域蘭学へのコミットと、逆に職人の技術を横杆とした加賀蘭学の展開の実態が、この地域の特色のひとつといえよう。かくして、加賀の「技術文化」は、天文学や測量術の優れた事例や時制の改正事業にみられるように、かなりの水準を保持しつつ、この地域独特の達成に至ったものと思われる。そして、こうした加賀藩の「技術文化」を支えたのが、実学者（技術者）と蘭学者（地域蘭学）の相互補完関係だったといえるのである。